
ヤクやリゃ何かが

瞑狩り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤクやりや何かが

【Nコード】

N52060

【作者名】

瞑狩り

【あらすじ】

才能とちよつぴりの努力を重ねて生きてきた脱力系少年「佐藤」は、薬の売人の仕事をしている最中に一人の少女と出会う。兄を捜すために少女は佐藤達以下5人の売人と組むことになり……。

それらしい言葉はいくつかありますが、実際の行為は書くつもりはないのでR15です。

1・ヤクな仲間達

穏やかな風が土手に吹き下ろす。その風は川にさざ波を起こし、草木を静かに揺らす。太陽の日差しはちょうど良い温度で地面を暖めた。つまり、昼寝には絶好の機会なのである。

「……ふぁー」

大あくびをして、キャスケット帽をかぶり込むのは一人の少年、愛称佐藤である。

似合わないサングラスをかけるのは、かつこつけているわけではなく、紫外線対策のためだ。五月は案外知られていないものの、紫外線ピークの時期だ。別に日焼けを気にするような乙女ではないものの、知らず知らずのうちに目が痛んでいるというのは、なかなか怖い気がする。そんなわけで、そんな事実を知ってから紫外線対策のためにサングラスを買った。このキャスケット帽もその一環だ。

「ん。時間ある……」

腕に巻いた時計は、待ち合わせ時間十分前を示してはいたが……。基本気心知れた仲。多少の遅刻は許されよう。と思っていたわけだが。

「こらーさとー。行くぞー」

仲間に捕まった。

「相変わらずのいばら姫ちゃんだな。俺あつしーの気分だぜ」

「あつしーって？」

「……。仕事しような、今日こそ」

そう悲しげに佐藤につぶやくのは、これまた愛称鈴木である。鈴木は自転車の荷台に佐藤を乗せ、細い道を走っていた。

そう軽くはない佐藤を乗せてのふたり乗車に、自転車はぎしぎし行っているが、この坂道を下ればもう用なしだ。

すでにスタンバイしている仲間が見えた頃に、ブレーキをかける。これがちょうど仲間の目に前に止めるこつだ。これがなかなかスリルが味わえて一興。……惜しむらくは荷台乗車の人間を振り落したりすること位か……。

キッ———！

自転車は綺麗な弧を描き、理想な停車をした。鈴木は満足がいったように、見せつけるように手をはたいてみせるが、それが全くかつこよくないことこの上ない。

「ほんじゃまー。ちよいと足を伸ばして佐藤はここでー、鈴木はこころ、高橋はー……」

じゃらじゃらと無駄な小物を付けた統率役、愛称渡辺が地図を広げてつきつきと話す。そういえば今日の星占いでは一日中にコニコしていると運氣アップだとか……。

佐藤は鈴木がかっぱらってきた自転車の後部座席から降りようとせず、横目で見ながら聞き流していた。

白い粉末をポケットに不用心に入れて、佐藤は有名な繁華街の裏

に来ていた。

どんな所でも、光あれば闇があるように、表があれば裏がある。その裏側には、表で所望できないようなものやサービスを提供する。案外裏側は裏側で、法律というルールが決まっている。そういう意味で、治安は良い。……、もっとも表の治安と裏の治安では意味が多少違うが。

「適正価格にサービス付けて、無料ニコニコスマイル……。適正価格にサービス付けて、無料ニコニコスマイル……。適正価格にサービス付けて、無料ニコニコスマイル……」

佐藤が呪詛のようにつぶやきつつ裏に到着すると、一人の女がいた。頭からしたまでなめ回すように見て、いい女と断定する。なかなか好みだが……。とりあえず話しかける。

「客引き？」

「ううん。むしろ客待ち。ピンよ」

妖艶にほほえむ女は、しかし体つきはまだ女子高生のように見える。

「遊ぶ？」

女は上の三つボタンを外した状態で迫る。誘われない気持ちは山々だったが、こちらにも仕事がある。

「結構。やる？」

もちろん、ビニールに入った粉末をちらつかせて。ああ、笑顔も付けなければ。

「やめとくわ」

ノーと、身振りを使って断ったからに、それ以上進めるのもあれなのでスルーする。佐藤がふうとため息をついて粉を見る。

誰でもわかるだろうが、いわゆる脱法ドラッグ。まだ警察の手に

は触れちゃいない。傾向摂取なので法には触れているがばれなきゃ良い。自分をはじめ、鈴木達はこれを行う仲間だ。いい仲間になっている。

「お、アベックがここで何やってんだあ？」

典型的な酔っぱらい親父が、下卑た笑いを浮かべながら佐藤と女を見ていた。女はあわてたように佐藤より前に歩みで、潤んだ瞳で男に上目遣いをする。……、女つてすげえ。

「この人とは関係ないの……、ねえ私と……」

そこから先は男が財布を出したことで遮った。女に近寄って札を一枚握らせる。素早く視線を走らせると万札だ。おそらく一晩だろ

う。

「こっちでやるうぜ」

「いいわよ」

酔っぱらいが女の手をつかんだとき、女のもう一方の手は佐藤の袖をつかんだ。

「お……つと」

急に引つ張られ、体勢を崩す。女に文句を言おうとしたときには、すでに手は離れ女は酔っぱらいとともに角を曲がった。

「ん……？」

その女は、娼婦の顔から決心した生け贄のような顔に変わった。

1 ヤクな仲間達（後書き）

ここで書くのは初めてなので、いろいろ不慣れですがよろしく願
いします。

2・気になる女

鈴木の仕事はいくつかあるが、その主な仕事に佐藤の回収がある。猫のようにふらつといなくなり、すぐ近くで昼寝をしていたとか、木の上で昼寝をしていたとか、どっかのオフィスの敷地内で昼寝をしていたとかは割と日常茶飯事。

年がかなり近い佐藤の世話を任されるのは以前はブーイングものだったが、最近は佐藤の態度が軟化しているのでなかなか楽しい。……、最近言葉のギャップ差を感じつつも。

「俺って実は……、古い人間……？」

自転車をこぎながらたどり着きたくなかった思想にたどり着く。相変わらずの、少々拝借した自転車で今日はピンクのママチャリだ。大丈夫、用が終わったらすぐに近くに放置する。

佐藤は最近よく寝転がっているはずの土手にはいなかった。土手を現在のすみかとしている佐藤に、目印を付けてくれと言った結果、最近タンポポが群生している近くに寝ているはずだが。

「めんどくせえ……」

自転車から降り立つと、あたりを見渡して……。一人の少年を見つけた。土手をずいぶん降りた先、綺麗な川に沿って設置されている柵に寄りかかっている。

「おい、佐藤」

振り返る佐藤は、今日はキャップを身につけていた。昨日のキャップはどうしたのだろうと、帽子をじっと見つめている鈴木に、佐藤はもそっと話しかける。

「昨日いい女の子見つけたんだ」

「女の『子』？」

「嘘、女だった」

受けた印象からうつかり言ってしまったが、おそらくあの女は「女」として振る舞っているのだろう。

「どんな子？」

にやにやとしている鈴木にため息をつく、佐藤は自分の頭をたたく。

「身長は165位」

「田中と同じ位か」

「俺の千里眼と透視眼でバストは84」

「お、なかなか」

「ウエストは61」

「おふうつ。すげ……」

「ヒップは88」

「……いい女だな」

うんうんとうなずき鈴木に、佐藤は睥睨^{へいげい}する。鈴木のパケットから問答無用でケースに入っているタブレットを口に放り込んだ。

瞬間、突き抜けるすさまじい刺激と冷気が口の中に広がる。悲鳴ともつかぬ声を上げながら、佐藤は口を押さえてしゃがみ込んだ。

「どうだ、眠気覚まし用のタブレット。キクだろー？」

「……」

射殺すつもりでにらみつけると、鈴木はそれをあっさり受け流し、行くぞーと言って自転車まで引きずった。

3・気になる女(2)

《そんなに気になるなら一度やつちやいな!》

そんな鈴木のエールを送られ、佐藤は昨日の場所を歩いていた。佐藤の最近の持ち場はここで、それなりに買い手も多いこと有名なのであるが。

「そろそろいくつかさばかないと……」

いい加減に怒られる。商人気質の鈴木はしょうがないと言ってくれるが、昨日、一つも売れなかったと言ったときの仲間である田中の表情とセリフは今でも忘れられない。

《いい加減にしねえと売るぞ》

何を、と言う前に佐藤は震え上がった。ウジ虫を見るように小説から顔を上げた田中に、リーダー格の渡辺達がなだめてくれたが……。今日まともに売れなかったらきつとんでもないことが起こる気がする……。

「あ」

「あ」

どちらともなく上げられた声と同時に、女はため息をつく。

昨日はスタイルばかりに目をとめていたが、実質よく見ると顔の造形もなかなかだ。だが少女のようである。

髪はこの闇夜にまぎれるかのような黒色だ。白い、薄化粧を施さ

れた肌とは、結構寒々しいコントラストが映えた。

「……」

沈黙が続き、興味がわいた佐藤が話しかけようとして、三人の男の訪れにため息をつく。

「お、いい女」

端的に感想を述べたリーダー男は、女の肩にぼんと手を置く。女は上目遣いでいいわと答えた。了承だ。

そしてこれは佐藤にとってもチャンスである。さつと前に出ると、女はともかく男でさえも眉根を寄せ……。だが男は顔をぱつと明るくする。

「いつもお世話になってんなあー、ちよつと買つとくよ」

「こちらこそ毎度ありがとうございます」

不自然なまでにニコニコし、薬と代金を交換する。これで田中の機嫌を必要以上に損ねることも、何かを売られることもない。一安心だ。

「おい、遊びたいんだけど、そっちは？」

女を値踏みしているリーダーとは別の、針金男が佐藤に尋ねる。

媚薬のたぐいを求めているのだろうか、あいにく媚薬の方は持っていない。

「精力剤的なものなら」

「じゃあそれで」

鈴木にニマツとした顔で渡され、どう処分しようか考えあぐねていたところの奇跡だ。代金は……。

と考えて。

「んじゃ金はこのくらい……」

針金の後ろにいる寸胴男は財布を取り出して、それを佐藤が制止した。

「いや、それはいらない。その代わりに遊ぶところ見せてほしいん

だ」

女のことを気になったが故の、観察を意図してのことだったのだが、明らかに別の意味でとられ、ぶしつけの目で見られる。

「そっちなよ……」

針金や寸胴も顔を見合わせ、リーダーのコンタクトを送る。リーダーはため息をついて、いいぜと答えた。女は激しく嫌悪の表情を見せたが、それも至極当然のことで、佐藤は肩をすくめる。

「とりあえず、場所を変えましょう」

案内されたのは、女がたっていた場所から徒歩一分のところにある廃ビルだ。元はホテルだったらしく、ベッドや調度品が多少色あせた状態で置かれていた。女がエスコートする。

「それじゃ……」

リーダーが後ろのふたりに目配せする。後ろのふたりはぶすつとした表情でうなずいた。

一方佐藤は視界の隅に写らないように行動し、部屋を調べていた。気になったのは非常扉。正規のルートから入ったからに、ここはほとんど使わないはずだ。だがホコリは全くとまっていないうし、扉には誰かが手を加えたような痕跡があった。

男が女がいるベッドの上に乗って……事態は起こった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5206o/>

ヤクやりゃ何かが

2010年10月29日11時57分発行